新撰な彼ら

shiraha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新撰な彼ら

【Ｎコード】
Ｎ３５２４Ｘ

【作者名】
ｓｈｉｒａｈａ

【あらすじ】
銀魂のトシと総悟が監禁された話の中にオリジナルヒロインの佳奈ちゃんを組み合わせてみました。

その他もろもろの話連載中。

鍵取りゲーム

ガタン

目を覚ますと真っ暗なロッカーの中に私はいた。

ガチャ…

「やっとお目覚めですかィ？」

「呑気に寝過ぎなんだよ。」

「総悟にトシ。あー、まぁた総悟の仕業ね？」

右隣のロッカーにはトシ。正面の棺桶っぽく横たわるロッカーに総悟がいた。

「違いますぜ？首元のコレ気にならないんでさぁ？」

「首？」

私は首を触った。ジャラッと首輪で繋がられている。

「ったく。とりあえず出ようぜ。」

「ん。」

それぞれロッカーから出ると仮面をした男がモニターに映っていた。

《いいか諸君。君たちの首輪は繋がられている。奥の部屋に首輪の鍵がある。それを取れば…》

総悟が全力で走った。

ズルズルズルズル

メリッ

トシが引っ張られ、壁にめり込む。

「手が届かねぇ。」

「あれ？私は二人と繋がってない。」

《君は一応華的な存在だ。君専用のトイレもある。》

トシと総悟が引っ張り合ってる。

「私トイレ。」

「いいんですかィ？盗撮してるかもしれねぇぜ。」

「うそ！じゃあトシが壁になって。」

「ぶはっ！バカかてめぇ！」

総悟がニヤリと笑った。

「じゃあ壁を向いて三人でシたらどうですかィ？」

「それはそうだな。」

「私女だから！」

総悟は壁に近づいてった。トシも反対側の壁に向かう。

「やっぱ無理！」

バタン

私はトイレに入った。盗撮はなさそうだった。

トイレから出るとトシがおかしい気がした。

「トシ？」

「…っ。」

「とりあえずこのコンクリートの欠片でパイプを叩いたらどうですかィ？」

総悟が真面目に言った。

「あぁ…そうだな。」

ガンっガンっガンっ
総悟は一人でパイプを叩いた。

トシはそれを見て何か考えている。

「ねぇ。総悟らしくないよね。いつもならトシを殺す勢いで石を投げてるのに。」

ガンっガンっガンっ

「何を言ってるんですかィ？今は犯人にとらわれないことが先決に決まってるだろィ。なぁ、土方サン。」

「…あ、あぁ。佳奈も手伝え。」

「ん。私は私のをほどかないとね。」

トイレのドアノブに巻き付けてある鎖。私はあの鍵まで届かない。
犯人によると鍵を一人が使ったら他の二人の首輪が爆発するらしい。

「私のはすぐ取れそう。」

「はぁ。佳奈が自由になっても意味ないでさァ。」

「総悟の言う通りだな。」

「ちょっとひどくない？もとはといえば二人がドライブに連れて行くとか言って私を拉致ったんじゃない！」

「パトカーに乗ったの初めてって騒いでたじゃねぇか。」

こういう奴らでしたね。

「私は先に脱出して近藤さん呼ぶからね。」

「へぃへぃ。」

すると、トシが総悟を睨んだ。

「総悟疲れたんじゃねぇか？先に休めよ。」

「いえ、土方サンこそあの鍵の前で休めばいいでさぁ。」

「総悟は鍵の横がいいだろ？」

なんだこの二人。

「私は先に寝るね。」

「俺も寝る。」

「俺が寝るでさぁ！」

「うん。寝ようよ。」

バン！

バタン。

総吾はドア無し。

なにこれ。首が凝るんだけど。最初は総悟の悪戯だと思ったけど、あんなに芝居できるわけないよね。

あと3日もあるし。

グルルルル…
お腹すいちゃってなかなか寝れない。

２０分後
私は爆睡した。

そして１０時間後。

ガチャ
「ふわぁー！寝た寝た！」

「俺も爆睡だったぜ。」

「最高の寝心地だったでさぁ。」

この二人絶対眠れてないね。モニターにまた仮面野郎が映った。

《鍵はまだ取ってないようだな。今から俺の相棒をそっちによこす。
「たけしー！ご飯よー」母ちゃん！勝手に入んな…ブチッ》

「おい。今母ちゃんて言ってたよな？」

「あのパーマからすると浪速ね。」

「そんな事より見てくだせぇ。あの影は…」

大きな影が鍵に近づいて来た。

それは大型犬だった！

《ちなみにその犬は光り物が大好きでね。いつも散歩の時に俺のところまで持ってくるんだ「たけしー！開けなさい！！お父さんが話しがあるって！」「たけし。来なさい。」…なんで父ちゃんに言ってんだよーー！ガタン》

「ねぇ。今お父さん出て来たんだけど。どゆこと？」

「そんなことより。佳奈。この状況で爆笑とはどういう神経でさぁ。」

私は爆笑していた。

「だっておかしいでしょ。あのシリアスな雰囲気から犬て…あはは！！」

その時トシが変な声で叫んだ。

「あの犬…鍵を食いやがった！」

「これでいいんでさぁ。俺たちは協力して脱出するから鍵はいらねぇ。」

「総悟…あんたほんとに総悟なの？」

が、犬が鍵に●んこしようとしている。

「うぁぁぁぁあ！！」

トシが全力で走った。総悟は壁にめり込む。佳奈の笑いが止まる。

「ちょ…。総悟大丈夫？」

「とうとう本性を現しやがったな。」

トシは犬を片手に鍵を窓の外に捨てた。

「これで邪魔な鍵はなくなったぜ！パイプを壊すぞ。」

するとまたモニターから声がした。

《お前らに脱出するヒントをあたえる。左右の奥のロッカーにアイテムが入ってるから使え。》

ガタッ

「総悟！」

「とりあえず見てみるしかないでさァ。」

開けたらチューチューアイスが一本入っていた。

「俺はそっちがいいでさァ。」

「あ？これは一本で食うもんだろ。」

「これだから一人っ子は。」

「私にもわけてよ！」

「佳奈は俺のをチューチューしとけばいいんじゃないですかィ？」

総悟が黒く笑った。

「総悟よりトシが大きそうだからトシがいいかな。」

「おまえら何の話してやがんだバカ！」

突然総悟が倒れた。

「俺はもういいでさぁ。二人でチューチューしてくだせぇ。」

「総悟！」

「うそ。冗談でしょ？」

「あっちのロッカーにコレが入ってあったでさァ。俺がコレで…」

ブシュッ…

総悟は糸のこぎりで首を切った。

薄暗い部屋に散らばる血…。

「う…そ。」

「佳奈掴まれ！」

トシに手を伸ばすと恋人繋ぎをされた。

「どうしたの？」

「う、ぉぉぉぉぉぉ！！」

トシが総悟を肩に乗せ、私と手を繋ぎ踏ん張りだした。

バキッ

バキバキ…

《まさかあの地道な作業が意味のある事だったのか！》

ぶちぶち…

バキン！

なんとトシは鎖をドアノブとパイプから解放したのだ。

「トシすごい！」

「行くぞ！」

私たちは走った。が、トシは足場の悪いコンクリートによって落ちてしまった。

「トシ！今助けるからね！」

「くそ…！」

総悟がムクリと立ち上がった。自分の首輪を簡単に取り外し、私のも取り外してくれた。

「へ？」

「楽しかったでさァ。土方…バイバイ。」

ヒュー…

「ふざけんなコノヤロー！」

ドゴッ

「やっぱ総悟の悪戯だったんだね。」

《いやぁ！楽しかったですね！またお願いします！》

「今度は銀パツパーマ野郎にしますぜ。きっと面白れぇモンが見れるでさァ。」

鬼だ。可愛い顔してやっぱ総悟は鬼だ。

「さ、佳奈とドライブの続きでもしましょうかねィ？」

「え。トシは？」

「土方の野郎はもうよじ登って来てまさァ。」

下を見るとトシが鉄骨を自力で登っている。

「総悟ぉぉぉおお！！首洗って待ってろ！！」

「知るか。佳奈は俺のモンでさァ。」

「最後だけヒロイン落ち？？」

こうして総悟のドッキリは幕を閉じた。

鍵取りゲーム（後書き）

中途半端な話から始まってしまいすいません。徐々に銀魂を勉強していきます。

マヨから始まる不思議な出会い

これはオリキャラと新撰組二人の出会いの話である。

沖田総悟は土方十四郎と町の巡回をしていた。

「げ。マヨが切れた。総悟買って来い。」

「俺ァ忙しいんでね。」

「って！何アイマスク取り出してさぁ寝よう的な顔してんだよ！」

「マヨ臭いんでこれ以上近づかねぇでくだせェ。」

そんなわけで土方十四郎は近くのスーパーに入ってった。

「げ。マヨが品切れじゃねぇか。」

レジに並ぶ女がカートいっぱいにマヨを入れていた。

「おい。１０個譲れ。」

「へ？あぁ、マヨなら5キロ先のスーパーにありましたよ。」

それが佳奈との出会いだった。

「頼む！一個でいいから！」

「新撰組が土下座していいんですか？」

「マヨの為ならしょうがねぇ！」

「何がしょうがねぇんでさぁ。マヨくらい取りあげりゃ…。」

沖田総悟は固まった。マヨを持つ女に見覚えがあったからだ。

「おめーは姉貴の知り合い。」

「総悟じゃん！」

そしてマヨを半分貰った土方。

「自分のスーパーがマヨ切れ？」

「そうそう。ウチの店やたらとマヨの売れ行きが良くてね。」

「おめーのおやじさんの店なんじゃねぇかィ。あの頓所の前の店。」

土方はタバコの火を付けた。

「ったく。誰だそんな重度のマヨラーは？」

「コイツでさぁ。二度と店に出入り禁止にしねぇとまたマヨ切れしますぜ？」

こうして彼らは出会った。

「おい。スーパーの娘。」

「土方サンですよね。私は佳奈です。」

「これからキープたのんだ。」

「土方の野郎のおかげで昼間の時間がなくなったでさぁ。」

…

……

「佳奈との出会いってコイツのおかげだったな。」

ちゅーー

マヨをすするトシ。

「俺ァ遠い昔から出会ってたでさァ。」

「もうちょいマシなエピソードなかったわけ！！」

私たちの出会いはマヨから始まった。

ミントン山崎

最近山崎がソワソワしてやがる。俺は仕方なく後をつけた。

ドカン！

あと半歩遅かったら当たってた。

「何サボろうとしてるんでさァ。」

「総悟。まだ時間あるだろーが。」

日常茶飯事の事だから驚きもしねぇ。

「俺ァ一眠りやす。」

チッ。総悟のせいで山崎を見失っちまった。

適当に廊下を歩いていると、塀を越える高さまで跳ねるミントンの羽を見つけた。向こうで誰かがミントンやってやがんのか。

俺は直感的に正門を出た。

「山崎と佳奈！」

二人は楽しそうにミントンをしていた。

「いやぁ。日に日に上達してますね！」

「山崎さんが教えるのが上手いんですよ。」

ぽーん

ぽーん

「山崎の野郎俺の佳奈に手ェ出すなんざいい度胸でさァ。」

「び…くりした。お前寝るんじゃなかったのかよ。」

「そろそろオシオキの時間でさァ。」

総悟がニヤリと笑った。

「うわぁ！沖田隊長！」

「慌てるほどの事じゃねーよ。」

総悟は鞘を…。

「あれ？ミントンラケット？」

「佳奈をかけて勝負だ。ミントンキャラは俺が奪ってみせるぜ！」

「やめろ総悟。時間だ。」

俺はいいタイミングでコート中に入った。

ズビシィ！

あれ？今頭に何か当たった気がするんだケド。

「部外者はすっこんでろ。」

へ？山崎？

「土方サン。男の勝負に口を挟むモンじゃァねェぜ？」

邪魔？ねぇ。俺邪魔者？

「トシ。マヨあげるからおいで。」

「俺はモノで釣られる…。」

そして佳奈の隣でマヨをすすりながら二人の試合を見た。

「沖田隊長やりますね！」

「俺より早く彼女作ってんじゃねェよ。」

「まさかそんなプライドの為に？」

だんだん飽きて来たのか欠伸をし出した佳奈。

「トシ。私帰るね。」

「このマヨ貰っていいんですか！？」

「なぜに敬語。トシに持って来たからあげる。てか、口つけてるから使えないし。」

「いつでも遊びに来い！」

マヨがタダで貰えるなら何でもいいんだよ。

「こんなモンでさァ。」

総悟は山崎に勝った。

「沖田隊長！ミントンキャラはどうか取り上げないで下さい！！」

「土方の野郎抹殺計画に協力するなら仕方ねェ。」

「おい！聞こえてるぞ！」

「はい！協力します！」

そしてまた総悟がニヤリと笑った。

購買部的な役割

新撰組の屯所の前の小さめのスーパーの娘で手伝いをしている私、佳奈。

元々は総悟の家の近くだったんだけどつい1年ほど前に越して来た。新撰組の人たちが訪れる事が多い…わけじゃない。たまに近藤さんが来てくれる程度かな。

「あー…、暇。」

適当に店の窓の掃除をしながら呟いた。

ガー…

自動ドアが開く音がしたから大きな声でお出迎えした。

「いらっしゃいませ！」

「最近見ねェと思ったら真面目に働いてたのかィ？」

ニヤリと総悟が笑った。

「ひょっとして近藤さんのおつかい？」

「バナナ食いてェって不機嫌そうに呟いて胸を叩いて暴れてたぜ。」

「ゴリラと間違ってない？」

総悟は新撰組ソーセージの前で止まった。

「今なら一本増量だよ。」

「領収証くだせィ。」

バナナ一房と新撰組ソーセージを買ってった総悟。経費で落とすあたり彼らしい。

また暇になった。

ガー…

「いらっしゃいませ。なんだ。トシか。」

「最近近藤さんが元気ねぇんだよ。フルーツ盛りあるか？」

「さっき総悟がバナナ買ってったよ。」

「へぇ？やっぱ俺はフルーツ盛りを買わねぇとな。あと、タバコ。」

レジに走る私。

「親父さんはいねぇのか？」

「ん。お父さんもお母さんも営業に行ってるよ。」

「こんなちっせぇスーパーが営業に行くのかよ！」

「半分サボりだと思うけど。」

トシは経費で落とさないらしい。

「またドライブ行こうぜ。今度は二人きりがいいな。」

「パトカーならやだよ。」

トシはタバコに火をつけて店を出た。

近藤さん大丈夫かな。

ガー…

「佳奈ちゃーん！元気？」

近藤さんはめっちゃ笑顔で店に入って来た。

「あれ？近藤さん元気ないんじゃ…。」

「俺はずっと元気ピンピンだ！」

総悟もトシも理由をつけてここに来てくれたのだろうか？

「バナナ安いな。」

暇すぎるからバナナを買ってもらう事にした。

ハピバ天パくん

「お。喧嘩か？久しぶりにやるか。」

土方の野郎がパトカーから下りた。しゃあねェから俺も遅れて下りやした。

パチンコ屋の前で野次馬が集まっている。

「あれ？多串くんじゃねぇの。」

天パでやる気のなさそうな男が近づいて来た。

「あんちゃん。話ついてないぜ！」

「へ？だから、俺はパチンコの玉くすねたりしねぇってば。」

「うそこけ！俺の一箱丸ごと持ってったじゃねぇか！」

くだらねぇ掴み合いしてやがる。土方サンもあきれて…。あれ？何かこの人汗すげぇでさぁ。

「総悟。俺ァパチンコの玉なんかくすねたことねぇからな。若気の至りとかじゃ全然そんなん…バカだろアイツバカ！」

「カミングアウトしてどうするんですかィ？」

「よし。行くぞ。」

それにしても、銀髪天パの男どっかで見たことあるような。

「おい。何してんだ？」

「やっぱり大串くん。このオッサンが因縁つけてくんの。俺今日誕生パーティだから忙しいんだけど。」

「分かった。一箱分払え。」

「マジで俺を疑うわけ？この純粋な眼差しが見えないの？」

「ただのオッサンの喧嘩でさァ。散った散ったァ。」

野次馬を解散させて二人を見た。

「俺、ジャンプ代しか手持ちないんだよね。」

土方サンは銀パツ天パ野郎の財布を奪った。

「こりゃ、ジャンプ代もねぇな。」

「え。あのオッサン俺の財布からお金までとったの？一箱分払えよ。」

「いや、話をややこしくしても無理だから。」

店の人が出て来た。

「あの…。サングラスの親父が一箱奪うの見ました。」

「ほら、俺じゃねぇだろ。あーあ。パーティに遅刻しちゃう。そー

だ。あのパトカーなら間に合うかも。」

「テメー…斬る！」

俺は山崎に車を出すように言った。

「ハピバでさぁ。」

１０月１０日は銀ちゃんの誕生日。

おめでとう！銀ちゃん！

本気と書いてマジと読む

ピー…

「はい。ちょーちん付けないとダメだよ。」

総悟はチャリの鼠取りをしていた。が、注意したチャリは慌てて逃げてった。

「今のガキはしつけがなってねェでさァ。」

「テメーもガキだろ。」

「土方サン。何しに来たんですかィ？」

「息抜きにタバコ買いに来たんだよ。」

結局この日は新撰組の屯所に帰ることになった。

「ガキといやぁ、佳奈って何歳だ？」

「ありゃあ童顔だから、俺よりガキでさぁ。」

「佳奈さんは22歳ですよ。」

運転手Aが話しだした。

「なんで知ってんだよィ。」

「山崎から聞きました。」

しーん

パトカーの車内は静かになった。

「腹ペコでさぁ。」

「マヨならあるぜ。やらねェけどな。」

「新撰組ソーセージ食いてェ。」

ふと外を見ると佳奈が男と歩いていた。

「俺ァ健康の為にジョギングで帰りまさぁ。」

「…。車停めろってよ。」

「はぁ。」

総悟は腹ペコなのも忘れて走りだした。

「総悟！」

「副長…。叫びながら何マヨを取り出してんすか。」

…

「佳奈ァ。見損なったぜィ。」

「ちょうど良かったぁ！今道聞いてたの。この方がめっちゃ親切でね。」

「じゃ、これで。」

道案内人はすたこらさっさと逃げてった。

「俺と言う男がありながら浮気するたァ。そんなに俺を好きなんですかィ？」

「何度も言うけどね。総悟の彼女じゃないから。」

佳奈の綺麗な黒髪が風に揺れた。

「ギャグに決まってらァ。」

「まぁ、可愛い。」

なんなんだ。コイツら。と二人を見ながらトシは後ろから歩いていた。

「佳奈って方向音痴だったのかィ？」

「ちっ！違うから！たまたまなの！」

「真っ昼間から下ネタとはいただけねェなァ。」

どうにかトシが入った。

「土方さんはパトカーで帰ってくだせぇ。佳奈は俺が送りやす。」

「総悟テメー！そこまでして抜け駆けしてぇのか？もうパトカーは帰ったよ。」

「二人とも私は一人で大丈夫だから。てか、トシはマヨに恋してるだけでしょ？」

トシはたまにマヨを差し入れするから好きなのか。

「俺は親父さんにバズーカを改造してもらうんでさァ。邪魔しねェでくだせェ！」

「お前も親父が付録だから好きなんだろーが！」

と言う事らしいです。

「どうせ。私には魅力ないですよ。」

先を歩く佳奈でした。

改造王の父を持つ子供の苦悩

私のお父さんはツルっとハゲている。

「佳奈ー。ペンチ持って来い。」

「自分で取ってよ！」

と言いながらもペンチを渡す私。

「お前の彼氏割り引きだから手伝ってもいいだろ。」

「総悟は彼氏じゃないってば。」

こんなに武器を改造したら、新撰組に捕まってもおかしくないのにいいのかな。

「でけた！バズーカ花火にバズーカクラッカー。」

「良かったぁ。それなら安全だね。」

裏口から総悟が入って来た。

「お父さん。パーティに盛り上がるバズーカ出来やしたかィ？」

「まだお父さんになってないよ？コレがバズーカ花火だ。でこっちがバズーカクラッカー。」

「面白そうでさァ。さっそくこっちのクラッカーを土方の野郎に試してみるでィ。」

やっぱ副長の座をもらう為に作らせたんだ。

「ときに総悟くん。」

「なんでさァ。」

「ちゃんとお金くれるんだろうね？」

「…ケチくせェハゲだぜィ。領収証を新撰組当てでおねげェしやす。

」

「はい。まいどあり。」

けど、本物のバズーカより危険じゃないはずだからトシにとっては良かったのかも。

その日の晩。
新撰組屯所。

「はぁ…。スッキリした。最近便秘気味でよォ。」

「副長。俺なんか下痢っスよ。」

トシと山崎がトイレから出て来た。

ズガン！
バズーカクラッカーが華麗に飛び出した。

「…。」
「わぁ。綺麗ですね！」
「チッ。腰抜かせたりしねェのかィ。」
トシの瞳孔が開いた。
「おい総悟。片付けろ。」
「生憎俺ァ片付けはしねェ主義でさァ。山崎ちょうど良いでさァ。」
「いや、俺には関係…」
「ミントンラケット折っていいのかィ？」
総悟の手には山崎愛用のミントンラケットが！
「…副長！」
「近藤さんに呼ばれてんだ。次通った時に床が汚れてっと斬るぜ？山崎。」

「えぇー！？汚したの俺になってますよね！ちょっと隊長どこ行くんですか！」

「次は花火だぜィ。」

次の日の朝、トシの部屋で花火が上がるとは誰も予想していなかっただろう。

「総悟ォォォオオ！！テメー斬る！今度こそぜってェ斬る！」

「受けてたちますぜィ！」

こうしてまた総悟は佳奈のパパに頼むのだった。

「あんれぇ！？最近領収証無駄に多くね？」

近藤さんは頭を抱えていたとか。

知ったカブリの恐怖

たまーに変なプライドが顔を出したりするじゃない？知らないのに知ってるに決まってんじゃん！って言ってしまうヤツ。

アレ、一番タチ悪いよね。

「まさか佳奈も万事屋の旦那を知ってるたァ気付かなかったでさァ。」

すいません。万事屋の旦那なんて知りません。なんかみんな知ってる雰囲気だから知らないとは言えなかっただけなんです。

「最近歳なのか物忘れするらしいよね。」

「あー、精神年齢は爺さんかもな。」

トシが頷いた。

精神年齢年寄りってことは若いの？山崎ヘルプ！

「こないだチャイナさんに入れられたボディーブローがまだ響いてるんですけど。」

チャイナさん？
まさか中国人の美女をはべらせてる人？

「あのメガネの存在感は山崎に比例するでさァ。」

メガネ？
メガネかけた旦那？

「多串くんじゃない。久しぶり。」

「今テメーの噂してたんだよ。」

銀髪天パの人が近づいて来た。どうしよう。知らないってバレる。
私は目をつぶった。

「改造ハゲの娘さんだよね。似なくて良かったな。うん。似てたら声かけなかったわ。」

奇跡がおきたぁ！

「てか、万事屋の前にいて俺に合わないのはおかしいって。」

「で、旦那と佳奈の関係は何なんでさァ。」

「んー。従姉妹の親父の友達の娘？」

「そう！そうなのよ！」

「撤収すっぞ。」

トシの言葉通り私たちは家路を歩いた。

…

「銀ちゃんいきなりどうしたアル。」

「空気吸いにいったの。」

「銀さん！仕事の依頼来ました！」

「また迷い猫だろ？」

彼らと絡むのはまた後のお話。

一緒にいると自然にマヨ中にな…らねぇよ！

「佳奈。そんなにマヨネーズかけたら太るわよ！」

「ぎゃー！なんでご飯にまでマヨネーズかけたの私！」

家族で夜ご飯を食べてる時、お母さんに注意された。

「最近トシとよく食事してたからその時自然とマヨネーズかけてたかも。」

「土方くんはそんなにバランスの悪い食事なのか？」

お父さんの目が光る。

「私が気をつければいいだけだからもうこの話はおしまい。」

そして次の日。

目玉焼きにマヨをかける私がいた。

「あれ。なにこの自然な動き。」

今日はお店が休みだからゆっくり起きたら、両親は出かけていた。

ガチャ…

裏口が開いた。

「ハゲはいねェのかィ。」

「総悟。ノックぐらいしてよね。」

「女捨ててるヤツに言われたくねェ。なんでィその寝癖は。」

「これはいま流行りのファッションよ！」

総悟が食卓に近づいて来た。

「…。マヨラーは土方の野郎で十分だろィ。」

「私このままじゃ本当のマヨラーになっちゃう。どうしよう総悟。」

ニタリと総悟は笑った。

「そんなの簡単だぜィ。」

総悟は丼にご飯を入れ、その上にマヨをぐるぐるとかけた。

「コレを完食すればマヨ嫌いになるぜ。」

「ご飯にマヨネーズ？」

「いいから食いなせェ。」

女としてさすがにコレは食べられないよなぁ。

ガチャ…

「総悟。やっぱりここか。近藤さんが…お！旨そうなメシじゃねぇか！いただきます！」

ガツガツとマヨ丼を食べるトシ。

「やっぱマヨはサラダにかけるモノだね。」

「佳奈も食うか？」

「お腹いっぱいだから。」

こうしてマヨラーになりかけた私はマヨラーにはならなかった。

「やっぱ佳奈の店のマヨは最高だな。」

「え。他の店と同じだけど。」

「土方さんは舌が麻痺してるんでさァ。さてと仕事に戻るとするかねィ。」

総悟が帰ってからトシがタバコを吸いだした。

「二人きりだな。」

「トシってばいきなり何？」

「今はいいけどよ。総悟とはぜってぇ二人きりになるんじゃねぇぞ。」

「はーい。」

「じゃ、俺行くわ。」

ポンポンと頭をなでられた。

「子供扱いしないでよ。」

ウソ。本当は嬉しいんだよ。

「明日メシ食い行くか。」

「んー。しばらくは無理。」

「はぁ？」

「ちょっと健康の為にね。」

「そういや太っ…」

「鬼の副長が私なんかとランチなんて笑われるよ？」

トシはニヤッと笑った。

「別に笑われてもいーぜ？」

「え…？」

トシは裏口から出た。

……

「何言ってんだ俺。」

「土方さん。抜け駆けはいけねェですぜ？」

バズーカが飛ばされたのは言うまでもない。

泣ける映画じゃ泣かねェと思います

暇すぎて死にそうなので、映画を見る事にした。

「これは運命でィ。」

「総悟も映画見るの？」

「『フランダースの斧』ねェ。」

「一緒に見ていいけど、夢壊さないでね。」

総悟と隣に座った。ちょうど真ん中らへん。

「クチャクチャクチャクチャうるせェ。」

「ポップコーンだからしょうがないじゃん。」

映画が始まった。

《この斧があれば、黄金の木を切れるんだよ！》《ダメだ。この斧に触ったら不幸になるんだぞ！》《おじいちゃんが助かるなら僕は構わない》

「グスッ…。そ、ご。ハンカチかして。」

「ずびっ。鼻水つきならあげるぜィ。」

総悟が泣いてる！？

「俺ならあの斧で土方の野郎を…」

ブツブツと言う総悟。やっぱり泣いてないんだ。

映画が終わって映画館を出た。

「総悟目真っ赤だよ。まさか泣いて…」

「花粉症が再発したのかもしんねェなぁ。ひょっとしてあの木は花粉が飛んでたんじゃねェかィ？」

「映画の木から花粉は出ません！」

「よし。フランダースの斧をハゲに作らせるぜ。」

本気で言う総悟が微笑ましく思えた。

「総悟ちゃん。どら●もん呼ぼうか？」

「まさか知り合いだったんでィ？」

…。

フィクションとノンフィクションを見分ける大人になろう。

嘘から始まるモンなんてねーとは言わない

スーパーの娘の佳奈ちゃん？実は従姉妹の親父の友達の娘でも何でもねーんだよ。
ほら、たまに町で見かけるたびちょっと気になってたから、他人行儀な態度されんの嫌だっただけなんだよね。

「銀さん。それストーカーだよ！」

「ストーカーはよくないアル。作者真面目にストーリー考えろよ。」

『万事屋銀ちゃん』は今日も暇である。

「ビラ配りのバイト手伝って欲しいらしいですよ。」

「だりぃ。新八頑張れ。」

「なんでも、新撰組前のスーパーらしいんだけど…。」

「あそこ嫌いアル。酢昆布いっつも置いてないヨ。」

俺はビシッと挙手した。

「ソコは俺が引き受けた。新八と神楽はパチンコ屋のチラシ配っとけ。」

「えー。なーんか怪しいアル。」

ビラを取りに行く為にスーパーに向かった。

勘違いして欲しくないんだけど恋とかじゃないからね。

「銀さんこんにちは！」

うわぁ。なんかシャランラン的なＢＧＭ聞こえて来たよオイ。

「ビラ配り手伝いに来たんだけど。」

「本当に配ってくれるんだね。はい。コレお願いします。ちなみに

歩いて１０分以内の場所くらいまでいいから。」

にっこり笑いかけてくれる佳奈ちゃん。

「え。ひょっとして佳奈ちゃんは配んないの？」

「うん。今日は珍しく休みなんだ。」

マジで？俺何しに来たのよ。親睦を深めたいから新撰組の前と言うハンデを突き破って来たのにこの仕打ち？佳奈ちゃんってアレ？極度のＳ？

「途中まで一緒に行こうかな。」

俺は心の中で小さくガッツポーズをした。

「このチラシ佳奈ちゃんが書いたの？」

「分かる？」

字がギャルギャルしてますから誰でも分かるだろ。

「従姉妹のおじさん元気？」

架空の人物が元気か聞かれたよォ。

「あー、タラフクさんね。確か今風邪こじらせて寝てばっからしいよ。」

「あはは！タラフクさんらしいね。」

いや、もータラフクさん貴方誰ですか？
そして通じるんだタラフク。

「そういえばユンちゃんが銀さんに会いたがってたよ？最近お店に来てくれない…って。」

ユンちゃん？
俺の架空の従姉妹か。

「ユンは金ぼったくるから俺としても辛いのよ。」

「えー。銀さんには厳しいんだね。」

蟻地獄だ。話が全く分からねーのに繋がるって何！何なの？むしろ繋がって欲しくないんだけど！！

「じゃ、またね！銀さん。」

「おう。ビラ配り頑張るからよ。」

こうしてまた佳奈との溝が深まっていった。

…

「適当にユンちゃんって言ったら通じたし。ユンちゃんって誰？」

悩む佳奈でした。

新撰組？いや新選組ですから！

新撰組じゃなくて新選組じゃん。と思う方、その通りなんです。

「んー。朝からごちゃごちゃうるさい。」

パチン

蚊は叩かれた。

「ってもうこんな時間！総悟に怒られる！」

佳奈はバタバタしながら顔を洗い、着物を着て家を出た。

「俺の愛が痛すぎて逃げ出したかと思ったぜィ？」

「いや、誰？」

家の前に立ってたのは紛れもなく総悟だった。

「今日は土方の野郎もいねェ事だし。デートでもしやすかィ？」

「何言ってんの？今日はトシに日頃の感謝をこめてプレゼント買いに行く日でしょ？」

「マジかよィ。そういう事なら一人で行けや。」

「早く行くよ！」

総悟の手を引き歩き出した。

「はぁ…。休みだってのになんでィ。」

「トシはマ●オ好きらしいよね。新しいの出てるじゃん。買っちゃう？」

「ゲーム機がねェとできねェよ。」

総悟はつまんなそうに言った。

「総悟ってば！お父さんとバズーカの改造の話の時だけイキイキしてるんだから！」

「へぃへぃ。土方の野郎なんてケチャップ買えば良いんじゃねェかィ？」

「ケチャップ？」

「マヨより使えますぜィ。もしもの時に血のりになるし。」

マヨよりケチャップの方が健康には良いかも。

「よし。トシをケチャラーに変えよう！」

「プレゼントも決まったことだし、散歩でもどうでィ？」

手を繋がれ私は笑った。

「エスコートよろしく。」

次の日。

「じゃん！ケチャップあげる！」

「会ってそうそう何だ？」

「これからはケチラーになってくだせィ。」

「ケチだァァ？テメーらおちょくってやがんのか！？」

トシに追いかけ回されたのだった。

銀ちゃんと書いていい加減と読む

嫌ァね。これは偶然だから。偶然少し前に佳奈ちゃんが歩いてるってだけだから。

ほら、電信柱に隠れたりとか全然しないよ俺。

「銀さん？」

「偶然。ホント偶然！こんな偶然あっていいんだろうか。」

ホント俺何してんの？佳奈ちゃんのストーカーになっちゃうとこだったよ。

「銀ちゃんって呼んでいい…かな。」

「じゃあ、俺は佳奈って呼ぶから。って何この甘酸っぱいやり取り。酸っぱいのいらないから。」

クスクス笑う佳奈が可愛いくてテンションが上がる。

「銀ちゃんもペットショップに来るんだね。最近のペット面白いよね。」

ふと気付けばペットショップに入っていた。しかもここは怪しいと評判の闇のペットショップ。

ホルマリン付けとかいっぱい並んでるし。

「あー、ファミレス行かない？」

「なんで？せっかくここまで来たのに。」

するといかにも怪しいですって感じのターバンを頭に巻いた店員が近寄って来た。

「コノ犬しゃべるヨ。」

と白い豆柴を抱き上げた。

「銀ちゃん何か話しかけてみてよ！」

「えー？…名前は？」

「ボクまだ名前ないヨ。」

いやいや、オッサンがしゃべってるがな。
佳奈ァ？なんでめっちゃ嬉しそうな顔してんのォォォオ？

「しゃべる犬はいくら？」

「オマエラ庶民には買えない値段ヨ。」

「いいなぁ。欲しい。欲しいよー銀ちゃん。」

「何援交の雰囲気かもし出してんの？銀さん帰るよ。」

ガー

「手を挙げろ！」

新選組登場。

「ターバン野郎だけでいいでさァ。…あれ？佳奈に万事屋の旦那ではねェですかィ？」

「総悟そっち行ったぞ！」

ガッ

総悟は店員の足を引っかけ、転ばせた。

「客からぼったくるたァいい度胸でさァ。」

「いいから手錠かけろ。」

こうしてインチキ店員は捕まってった。

「佳奈も来やがれ。」

「やだ。」

「万事屋の野郎と二人きりたァ、妬かせてまで俺に振り向いて欲しいのかィ？」

「どこがどうなってそうなるの！」

佳奈は大串くんに連行されてった。

ワン！

「そんな目で見ても飼えねェからな。」

俺は一人店を出た。

チャイナさんの正体

道端に食べ物が落ちてたら拾ってはいけません。
それは誰でも理解している小さい頃からの教え。

「ウマイ棒みっけ。」

そのチャイナさんは落ちていたウマイ棒を拾った。

「そんなの食べちゃダメだよ。」

「酢昆布無いスーパーの娘に言われたくないアル。」

ヤンキー座りしながらウマイ棒の袋を剥いてるし。

「結構前にウマイ棒に変なの入ってたってニュースで見たけど大丈夫？」

「ムシャムシャ…。そんなに欲しいならくれてやるヨ。」

と言って袋を投げた。私はゴミ箱かよ。

「新選組のみんなが言うチャイナさんだよね？」

「チャイナ？どこに目ぇ付けてるか。これはコスプレじゃ無いアル。」

「やっぱりそうなんだ！可愛いね。もっとセクシー系なのかと思った。」

「このナイスバディが見えないか！胸なんてこんなんヨ！」

ムキになるあたり可愛い。

「神楽ちゃん。またこんなところでサボって！」

メガネくんが歩いて来た。あぁ！この人が山崎くんと同じくらいの存在感の人だ。

「コイツが拾い食いしてたアル。」

「いや、口の周りにカスつけて言われても信じないって。すいませんね。…あ！スーパーの娘さん！銀さんが迷惑かけてますよね。」

めっちゃペコペコ頭を下げるメガネくん。

「あのー、楽しいからいいですよ？それに銀ちゃん面白いし。」

「なんて良い人だ。って神楽ちゃんがいない！じゃ、また…えーと…」

「佳奈です。」

「佳奈さん。僕は新八です。じゃ、また！」

バタバタと新八くんはいなくなった。

銀ちゃんに会いたいな。

「佳奈。こんなところで何してんだ？」

「なぁんだトシか。」

「ぁあ？」

そうタイミング良くいかないみたい。

スーパーマリオギャランドゥ。

「オイ。総悟。」

「俺は今爆睡してるんでさァ。邪魔しねェでくだせェ。」

「いや、バリバリ起きてんじゃねェか。」

「へッ。」

「しかも今鼻で笑っただろ！」

総悟に聞くのも面白くねェから、自分で会いに行く事にした。

ガー…

「いらっせーませ！」

「おじさん。佳奈は？」

ハゲがまた一段と光ってるし。

「部屋で彼氏の総悟くんとギャランドゥしてるよ。」

「ギャランドゥだァァア？」

俺は迷わず突撃した。

ドカドカドカ…
ガラッ！

「総悟ってゲーム下手なんだね。」

「まさか。このセンサーが壊れてるんでィ。」

「マリオじゃねェか！あのオヤジ…ギャランドゥとか言ってたぜ！」

「トシもする？」
「ギャランドゥで何想像しやがったんですかィ？」

ニヤニヤ笑う総悟に腹立つ　。てか、コイツさっきまで寝てたじゃねェか！

「お父さんってばギャランドゥじゃなくてギャラクシーだし。」

「ギャラクシー？」

「マリオが銀河を旅するって話しですねィ。」

「マリオが銀河を？
へぇ。面白そうじゃねぇか。」

久しぶりにワクワクしてきた。

「佳奈。もう目が疲れたんじゃねェかィ？」

「だね。終わろうか。」

「オ…オイ！」

二人は同時に振り向いた。

「俺もやってみたいんだケド。ダメ？」

「そこまで言うならしょうがねェ。」

「いや、私のだから。」

そして夜更けまでスピンやらジャンプやら…ヨッシーにも乗った。

総悟と佳奈は側に雑魚寝していた。

「げ。夜更けどころか夜が明けるじゃねぇか。」

たまにはこんなゲームもいいかもな。

愛しいかい？切ないね。

「最初に言っとくけどこれは恋とかじゃ全然ないから。」

銀さんがこう言い出して、僕は顔を上げた。

「そのくだり言った時点で恋ですね。」

「コイ？美味いアルか。」

酢昆布くわえながらまだ食い物の話してるヤツがいるよ。

「銀ちゃん。スーパーの娘ならもれなく余ったお菓子も付いて来るヨ。」

「スーパーのお菓子余らないから！」

「メガネは黙っとけ。銀ちゃんに言ってるアル。」

神楽ちゃん前半標準語だし。

「神楽がどうしてもっつーんなら、佳奈ちゃんに会いに行くけど？」

「いや、銀さんやることあるでしょ。さっき依頼人のおばさん帰ったばっかじゃないか！」

「んー。明日で良くね？銀さん疲れた。」

何だよこの甘えキャラは！

「おんぶしてあげようか？」

「振り落とされるからやめとく。新八お願い。」

「えー！？僕がおんぶするんですか？」

「……。冗談だよ。そんな嫌な顔することないじゃん。」

「じゃあその間はなんだァァア！！」

「愛しさとせつなさ？」

「そんなもん捨てちまえ！！」

近頃の銀さんは佳奈さんに夢中らしい。
けど恋とは認めたくないらしくため息ばかりはいている。

「ハァ。」

「銀ちゃんが昼間から喘いでるアル！」

「神楽ちゃん。どこでそんなの覚えてるの？」

「深夜番組アル！」

結局銀さんは出かけなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3524x/

新撰な彼ら

2011年11月2日02時16分発行